

宜野湾高校の生徒達へ（71）

2021.1.13

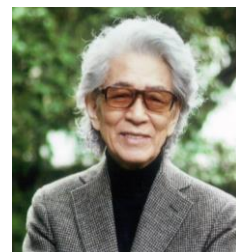
政府は1月7日に首都圏1都3県に非常事態宣言を発出した。本県でも新型コロナウイルス感染者が高止まりの状況である。これから大学入試等を迎える3年生をはじめ、皆さんはこのコロナ禍の中で何かしらの不安を抱えているのではないだろうか？

そこで、今回は五木寛之氏の『不安の力』（2003年・集英社）を取り上げる。「不安」という言葉から私たちが連想するのは、できるだけ避けたいマイナスの要因を持つもの、ではなかろうか。私たちは何かしらの不安を持って生きている。その不安を肯定的にとらえ、「生きていく上でのエネルギーに変えていったらどうだろう」と考えるのが五木氏である。本書を読むと、私がそうであったように、皆さんもこれまで不安に対して持っていたイメージが変わるだろう。

ぼくはいま、毎日、山ほどたくさんの不安にとり囲まれて暮らしています。
まず第一は、健康に関する不安。その次は時代の流れに対する不安。
それから、自分の薄汚れた部分や卑しさをとりつくろって、
見せかけの仮面をかぶって世間を渡っていくことへの不安。

どうしてこれほどの不安に囲まれながら、
その不安の山に押しつぶされずに生きてこれたのだろうか、と、
自分で不思議に思うことも少なくありません。

いきなり結論から言ってしまうと、
僕はいつも不安を感じていればこそ、こうして生きていることができるのだと思います。



明日のことはわからない。一寸先は闇。確かにそのことは不安です。
しかし、だからこそ、いま、この一日を濃く生きなければ、と感じる。
朝、目をさまして、ほっとします。ああ、眠ったまま意識を失ったりせず良かった、とため息をつく。
そしてとりあえずきょう一日を、できるだけしっかり生きようと思う。
自分に明日はないかもしれない、と不安に感じればこそです。
自分にできることは、いまやろう、と考える。できるうちに。
そんなふうにして一日が過ぎ、一週間がたち、一年、そして、十年が流れていく。

自分に明日はこないかもしれない、と思う。この国に未来はないのではないかと考える。
それを実感として感じるのが強ければ強いほど、
いま、この瞬間を大事にしようという気になってきます。

ぼくはものごころついたときから、不安を抱えて生きてきました。
少年時代もそうでした。そしていま現在もそうです。
よく考えてみますと、それらの不安をエネルギーにして生きてきたような気さえしてきます。

「不安は力なり」

そう言っても決してオーバーだとは感じません。
不安がなければ、こんなふうには生きてはいられないのではないかと。

頭から不安を追いほらおうなどと考えずに、不安を生きる力とする道をさがしてみたい、
これがぼくのいまの願いなのです。

本書を読んで、「不安」についての考え方は変わったが、いま大きな悩みや不安を抱えている人にとっては、納得しがたいかもしれない。そこで、次回も引き続き、本書を取り上げ、「不安」との付き合い方を深めていくことにしよう。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎